

## 〔教育実践の記録〕

### 高校「世界史」における「問い」の設定

小野 繁樹 (川口市立高等学校)

#### はじめに

周知の通り、アクティブ=ラーニング型授業において「問い(発問)」の設定はきわめて重要である。よく練られ、絶妙のタイミングで発せられる問いは、教室の空気を引き締め、生徒たちの集中力を一気に高める。

地歴・公民科の特に「公民」科目(「現代社会」「政治経済」等)ではこれは比較的設定しやすい。賛否両論にクリアに分かれるテーマが多く、その後の継続した「探究」にもつなげやすいからである。

「死刑制度」に賛成か反対か。「赤ちゃんポスト」に賛成か反対か。「食品ロス」を減らすにはどうしたらよいか。中・高校生に部活動は必要か。・・・等。

これに対し地歴科、特に「歴史」科目(「日本史」「世界史」)での問いは、ともすれば単純な答え探しに終わってしまい、話し合いや協同作業の手続きをとる必要もなく、教師・生徒1対1のやりとりになってしまっただけで主体的・対話的学びとは縁のないものになる。

宮崎猛(2017)はこの点を踏まえ、特に「世界史」へのアクティブ=ラーニング導入の意義について次のように述べる。

「世界史には多くの人物が登場し、多くの出来事が起こります。限られた授業時間の中で・・・事実の羅列と問題演習のくり返しに陥りがちです。しかし上記のような力(自分では気づくことのできなかつた見方や考え方を学ぶ)を身につけさせるためには、生徒が自分の力で情報を取り出し、他者と対話する機会をもつ授業構成が必要です」(126頁)

筆者は勤務校(全日制普通科)で1年生「世界史B」を担当しているが、授業のどのようなポイントでどんな問いを発すれば対話を促すことが出来るか、そしてそのための授業設計はどうあるべきか、等について、アクティブ=ラーニングの手法の紹介とともに報告したい。

#### 1 講義部分に設定する「問い」

アクティブ=ラーニングに関わる技法・手法は今もなお開発が進められていて、溝上慎一(2014)によれば、その一つである協同学習だけを見ても200以上あるといわれる。

それらの中で、教室の席順のまま容易に対話を促せるのが隣同士で行うペア討論(ペアワーク)である。

一つの問いを提示したら、まず一人ひとりがそれについて思考する時間をとる。そしてその中身を一人がもう一方に伝え、その際相手は聞き役に徹し、その逆をやる。

互いの考えを知ったところで、そこにズレがあれば、どこが分岐点になったかを考えさせ、意見が一致していれば共通点は何なのかを確認させる。

幾つかのペアに発表させる。

ローマ帝国の学習。カエサルのカリア遠征に触れた後、古代ローマ人の建築技術の優秀さを示すものとして国道建設を採りあげる。

「全ての道はローマに通ず」

彼らの手で造りあげられた道路の総延長は約 15 万キロメートルに及び、現代イタリアの主要幹線道路は殆どこの時代に完成していたといわれる。

代表的な「アッピア街道」の大版写真を提示して、この風景から何かを発見出来ないか問う。

即ち、一直線に伸びた「直道」であるが、ローマ人は主要道路は全て直線にし、前方に丘があればそれを削り、森があれば木を伐って、道路を迂回させるということをしなない。

ここで、大きな模造紙にマジックで大書した「ローマの国道はなぜ一直線なのか?」という問いを貼り出す。

ペアで話し合わせる。

ヒントは講義中に触れた「ガリア遠征」である。

敵地や反乱発生地に一刻も早くローマ軍がたどり着けるようにし、その機動性を確保するため、というのが教科書的な正解なのだが、話し合いの結果、正解に加えてもよいと思える秀逸な発表があった。

「一直線だから、ローマに侵入してくる敵をいち早く見つけ、守りを固めやすくするため」

オフense一辺倒でなく、ディフェンスにも配慮した直道造りである、というのである。

14代ハドリアヌス帝以来、ローマ帝国は財政難が進み、軍人皇帝が乱立し、内乱状態に陥った。

彼の死から 140 年、ゲルマン等異民族の侵入をくい止められない中、ローマ市内に新たに小さな城壁が築かれたが、周囲 11 キロメートルの城壁から出発し、世界帝国へと拡大したローマは再びこの壁の内部に閉じこもってしまった(NHK スペシャル『シリーズ ローマ帝国』第 3 集「さいはての兵士たち、忍びよる帝国の終えん」2004 年)。

この時、確かに、一直線の道路は侵入してくる異民族への備えとして役立ったのであろう。

後のモンゴル帝国による遠征は決まって冬に行われるが、冬枯れの原野では待ち伏せる敵を容易に発見出来るから、という理屈にもこれはつながる。

歴史分野での問い提示の意義は、これら想定外の見解に遭遇し、生徒たちの豊かな発想に驚かされるところに醍醐味がある。

(中国古代史の項羽と劉邦の争いにおいて、「では最終的に劉邦の勝因はどこにあったか?」という問いに対しては、劉邦には人望があり、多くの人々とともに敵をも引きつけたのではないかと答えたペアがあった。最終決戦時、劉邦軍は 60 万人にふくれあがったが、この中にはかつての敵=秦の兵士たちも多く含まれていたというのが研究(NHK『その時歴史が動いた』古代中国シリーズ「項羽と劉邦(四面楚歌)」)でも明らかにされている。このペア

の見解は図らずもそうした研究成果にストレートに触れていたのである。)

## 2 プリント中に設定する「問い」

歴史の学習には確かに多くの人物と出来事が登場するから、教師が板書し、生徒がそれをノートするということをしていたら時間が足りず、まして対話のための時間確保は到底無理となる。

そこで、板書は極力省略し、事実の流れ、その意味・意義等についてはプリントにまとめてしまうのが生徒にとっても親切であろう。

その際、重要箇所に関わり、プリント中に幾つか問いを設定する。

古代インド史の学習での宗教の誕生と発展。就中ヴァルダマーナの創始となる「ジャイナ教」はその戒律の厳しさ(「殺生の禁止」等)で異彩を放つ。

現代インドでもなお450万人の信者が戒律に従った日々を送っているが、そこで一つの問いを設定できる。

ジャイナ教徒の修行風景の写真で、信者たちは皆一様に自分の口許に小さな布片を当てている。これの意味するところは何か?

誤って虫を吸い込むことを怖れるからであるが、幾つかのペアが奇しくも同じような、そして慧眼に満ちた考えを披露した。

ジャイナ教では殺生を厳しく禁じている。世界の歴史を眺めても、戦争や殺し合いがこの地上から消えたことはない。人の争いは言葉から始まる。ならば喧嘩にならないよう言葉は慎重に選び、まして暴言等をもってのほか。その戒めを忘れないよう信者らは一日中自分の口許に布片を当てている。・ ・

こうした高校生たちの柔軟な思考、発想に触れると、硬直しがちな大人の側がアップデートされる思いである(ただし、大学受験の、特に論述・記述問題を考えた時、あまりに突飛な発想ではこれに対応できなくなるので、節目に、研究上主流となっている見解を幾つか提示することを忘れてはならない)。

なお、「問い」の中身は、生徒の思考が四方八方に伸びるようなものが望ましい。

中世ヨーロッパの「百年戦争」で、ジャンヌ=ダルクが現れ、劣勢だったフランス軍を建て直し、イギリスに対して奇跡の勝利を収めるが、そこで「無学文盲の村娘になぜこのようなことが可能だったのか?」という問いとなる。常識や科学だけでは説明つかない事柄に、人は意外と自由に思考の枝を伸ばす。

生徒たちは中学校「歴史的分野」で日本史についても概略は学んでいる。その中の江戸時代を思い出させ、「島原の乱」をヒントに投げかける。天草四郎という存在が人々を結束させ、幕府権力に対して驚くべき抵抗力を発揮してみせたが、これはヨーロッパ、日本をまたいでの似たような現象ではないのか。

あるペアが発言した。

困難な状況にあるからこそ、一つのシンボルが現れれば、それが信仰とかさなり、人々を団結させるのではないか。

また、正解が幾つにも渡るものだと、様々な角度からのアプローチも可能となる。

中世東アジア史、モンゴルによる日本攻撃(元寇)は結局失敗するのだが、では「その敗因はどこにあるのか?考えられる限り挙げてみよ」

授業前半の講義部分に既にそれらのヒントを散りばめてあるから、それを振り返らせる。

鎌倉幕府という中央集権的な武家政権が成立していたこと、そのもとで鎌倉武士団が結束し、広く九州の武士たちも動員出来たこと、貴族らが武家側に協力的だったこと、モンゴル軍内部の不団結(高麗軍, 旧南宋軍の不服従)により命令が徹底しなかったこと、・・等。

授業での講義部分と対話部分とをうまくリンクさせてやり、一つのペアにひとつの見解を順に述べさせていくようにする。

### 3 講義部分の一層の充実

溝上慎一(2017)はアクティブ=ラーニング型授業の基本的構造として、例えば90分という授業時間内で、講義部分と対話部分の両方を組み込んでデザインされるのが一般的だと指摘している。

高校の場合、普通1コマの授業は50分であるから、この中に対話部分を組み入れるとなると最低でも15分~20分はそのために確保したい。

すると、残り30分が講義ということになり、この時間帯がとりわけ重要になってくる。

一つの「問い」を投げかけるにしても、それに関わる十分な情報が生徒に与えられなければ充実した対話や協同作業には導けない。

この30分を、密度ある、インパクトある、そして生徒の興味を引き出せるようなものにして初めてアクティブな対話も可能となる。

筆者が一貫して重視するのは「ビジュアル効果」である。

特別支援教育士を名乗る竹内吉和(2012)は、発達障害(学習障害や自閉症スペクトラム障害)を抱える児童・生徒には生まれもって聴覚的短期記憶の弱さというのがあるという。つまり、文字や言葉の羅列だけでは駄目ということである。

これを補うため、画像・写真・映像等の「ビジュアル」を多用する視覚支援の重要性を指摘している。

「見るものというのは、見せている間は消えない情報です。これに対して聞くものというのは、一瞬一瞬消えていく情報です」

だが、これは、障害を抱える児童・生徒のみならず、老若男女、全ての人々に言えることではないだろうか。

百聞は一見にしかず。

タイムライフブックス編集部(1976)がかつて『ライフ人間世界史』という秀逸な歴史シリーズを刊行したが、その中の「古代エジプト」に、雄大なナイル河畔の大版カラー写真を二面ぶち抜きで載せた。

何千平方キロにも渡って広がる乾燥しきった荒涼たる砂漠の中に、川の両側だけに鮮やかなグリーンベルトが延々と延びている。川面は目の覚めるようなブルーであり、そこを

帆を風にはらませた船が幾隻も往来している(河口からの海風が帆船に推進力を与えるから、人力がなくても川上に遡航出来る)。

古代エジプト文明におけるナイル川の恩恵について教師が百万言費やしたところで、この一枚の写真の発信力には及ばない。優れた画像は雄弁である。

筆者の授業の講義部分では、ここぞという場面で選りすぐった「ビジュアル」を提示し、教育効果をより大きいものにするよう心がけている。

石川一喜・小貫仁(2015)らもまたこの点を強調する。「ことば」と「学習者」をつなぐものとしてグラフィック(絵や写真)を介在させることで脳が刺激され、インスピレーションが湧き、ファシリテーションをより促すものとなる。

こうした狙いは生徒の授業感想にも反映されている。

「様々な写真、イラスト、映像を参考にしてくれるので、時代の雰囲気分かりやすかった」(1年生男子)

「いろいろな情報がプリントにまとめられ、その中に写真や絵図もあり、分かりやすく、全く飽きない授業だった」(1年生男子)

アクティブ=ラーニング型授業とは、対話のための時間を確保することで、却って教師の講義部分全体に磨きをかける、そうした発条(バネ)を自動的に内包している。

## まとめ

ある研究会で、アクティブ=ラーニング型授業に不信を抱くらしい一教師が次のように発言した。

「アクティブばかりでラーニングがない」

紋切型の批判であろう。

これに対しては、私の授業を受けた生徒たちの感想が有効な反論になるであろう。

「討論会では他人の意見を多く聞くことが出来た。全て問題は、答えが一つでないことを知った」(1年生男子 2017年)

「先生に教わっていなかったら、世界史という科目をここまで好きにはなっていなかったと思います」(1年生女子 2018年)

「人生で一番楽しい授業だった。世界史の授業のある日はいつも楽しみだった」(1年生男子 2018年)

生徒の「学びたい」という意欲のコードに、教師は点火してやればよいのである。

当該教科・科目への興味、関心が惹起され、今度は自分で図書館やインターネットで調べ始めたりする。

講義と対話の連動が、一人の教師の授業力全体をアップさせる、というのはこの間ずっとアクティブ=ラーニング型授業(それ以前のFD運動も含めて)を追求してきた筆者の揺るがない信念である。

教師にとって、いつの時代も、最終評価者は常に生徒である。

## 参考

- ・石川一喜・小貫仁 編『教育ファシリテーターになろう!』弘文堂 2015年
- ・視聴覚教材 NHKスペシャル『シリーズ ローマ帝国』第3集「さいはての兵士たち, 忍びよる帝国の終えん」 2004年 NHK総合放映
- ・視聴覚教材 NHK『その時歴史が動いた』古代中国シリーズ「項羽と劉邦(四面楚歌)」 2003年 NHK総合放映
- ・竹内吉和『発達障害と向き合う』幻冬舎ルネッサンス新書 2012年
- ・溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂 2014年
- ・宮崎猛 編著『アクティブ・ラーニングの基本と授業のアイデア』ナツメ社 2017年
- ・森朋子・溝上慎一 編『アクティブラーニング型授業としての反転授業(理論編)』ナカニシヤ出版 2017年
- ・ライオネル=カーソン原著 タイムライフブックス編集部 編集『ライフ人間世界史 14 古代エジプト』1976年